五千両谷

南條範夫

五千両谷

南條範夫

桃源社

〈検印省略〉

五千両谷　　定価　四八〇円

著者　南條範夫

昭和四十七年十一月一日　印刷

昭和四十七年十一月五日　発行

発行者　矢貴東司

印刷所　堀内印刷

発行所　東京都中央区日本橋蠣殻町一丁目
十二番地　　株式会社　桃源社

(分)0093 (製)172071 (出)5180

1972 ©

目次

最後に笑う禿鼠……五
妖婦鏡態院……三三
市十郎の蒸発……六七
問屋の跡取り……九九
五千両谷……一二九
父と子……一八七
憎悪の果て……二二九

装幀　村上　豊

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

五千両谷

最後に笑う禿鼠

一

信長の自惚れと我儘とには、誰も彼ももうんざりしていた。いや、それどころではない。みんな、心の底から腹が立って、全身の血が沸き返るような思いをすることが何度あったか分らないのだ。全くもって傍若無人、自分以外の人間をまるでごみ屑のように思っているらしい。

冷静な観察者である宣教師ルイス・フロイスは平戸から上洛して信長に面謁した後で、ローマに、信長の印象を次のように書いて送った。

――この男は武芸には優れているが、粗野で、傲慢で、人の言を聞かず、王侯を軽蔑し、神仏も死後の世界も信ぜず、自分が全智全能だと思い込んでいる。

これには個人的な怨みがこもっていない。しかし、信長の客将や部下たちは、みんなフロイスの冷静な観察に、それぞれの個人的な憤怒と怨恨とを加えていたから、その判定は更に痛烈であった。

「あの男は、気違いです」

酒井忠次が、主君の徳川家康に云った。
忠次は蔭では信長のことを、いつも、
——あの男、
と云った。表立った場合には、むろん、
——右大臣殿、
と云ったのだが。
「そうかも知れぬ」
家康の答えは慎重だったが、内心、忠次に賛成していることは明白だった。
「あの男が、毛利を平げたら、その次には何を云い出すか分りませぬぞ。あの高慢の鼻がそれこそ秋葉の天狗より高く突き出ることでしょう」
「そうかも知れぬ」
「そうに決っております。この度の道中のことを考えてもご覧じろ。殿があれほど身を低くして鄭重な待遇をしたのに対して、あの男は馬上にふんぞり返って、まるで譜代の家来でもみているような態度でござった」
この度の道中と云うのは、武田勝頼を亡ぼした信長が、
——富士を見物しよう、
と云い出して、甲府から駿河に出て東海道を京へ帰っていった時のことだ。東海道は家康の領土である。家康は、川には橋を架け、山には道を開き、至るところに陣屋や休息所を新設し、その太った

からだが痩せるほど気をつかって接待した。
それに対して信長は、当前のような顔で、
——奇特の至り、
と云っただけである。
「徳川家は織田の家臣ではござらぬ。あの男、殿を一体、何と思っているのか」
「織田・徳川は同盟国だが、織田が指導権をとってきたのは事実、やむを得んな」
「そんな弱気でおられるから、あの男の為に、大切なお世嗣まで死なせてしまうことになりましたのじゃ」
家康の嫡子岡崎三郎信康は、信長の命令で切腹させられている。これを指摘されると家康も腸が煮えくりかえる様だ。
「それを云うな」
「いや、申します、申しまするぞ、殿。殿はお人が良いから、あの男の言いなりになって、来月、安土へ赴かれるらしいが、安土についた途端、腹を切れ——と云われるかも知れぬ」
「まさか——ばかを申すでない」
「本当のことを申すだけでござる。殿が安土へつくと、あの男、にやにや人を小ばかにした笑い顔をしくさって、あの辺りの安魚や安酒でも殿に飲ませた上、急に鬼のようなつらになって、家康、腹を切れ——と云う、かも知れませぬわい」
「わしに腹を切らせる理由などない」

「あの男には理由などいりませぬ。そうしたいと思うたら、それが理由でござる。必要なら十年前、二十年前のことでもち出して、尤もらしい理由にしますぞ」

これは本当だ。信長の重臣筆頭の林佐渡守は二十五年前の事件を理由に流罪にされたし、これも重臣の一人安藤伊賀守も十四年前のことを突然云い出されて放逐されている。

「どうすれば、よいと云うのだ」

忠次は、しばらく家康の顔を睨みつけるように見ていたが、呻るような声を出した。

「あの男を殺ってしまうよりほかありますまい」

家康は眼を大きく開いて、じっと忠次を見返した。

格別、愕いている様子はない。それどころか、その大きく開かれた瞳の底には微笑のようなものが浮かんでいた。

「お前も、そう思うか」

落着いた声で、家康は云った。

「えっ、殿も、そうお考えでしたのか」

忠次の方が驚いて、膝を乗り出すようにした。

「考えた。何度も」

「ならば——」

「が、わしは殺さぬ。主殺しの名は、一生つきまとうからな。斎藤道三や松永弾正が、よい例じゃ」

「では、みすみすあの男を——」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「待て、わしは殺さぬが、誰かが殺せばよい。信長が死ねば――」
「殿の天下でござる」
忠次は、嬉しそうに顔をくずした。
「で、誰にあの男を暗殺させるお考えでござる？」
「暗殺？　とんでもない。信長は暗殺などされる男ではない。戦って討ちとるほかあるまいな」
「となれば、殿以外にはそれをやれる者はありませぬ」
「ところが、わしはやらぬ」
「ええ、じれったい。一体誰に――」
「はて、誰にやらせようかの？」
狸おやじはにたりと笑った。この時家康はまだ四十歳だったが、既に狸おやじとしての風貌も内容も充分にそなえていた。
「権六はどうでしょう」
権六とは柴田勝家である。林佐渡が処分されてから、同じ事件に関係した事のある勝家は、いつ同じ運命が自分の上に下るかと、戦々兢々としているに違いない。本当に安心する為には、信長を殺してしまうのが一番だろう。
「だめだな」
「何故です」
「権六は信長を心底恐れている。信長の前に出ると、あの髯づらの髯が一本ずつ震えておる」

「見かけによらぬだらしのない男でござるな」
「勇気がないのではない、戦場では豪勇無双と云ってもよいのだ。が、人には苦手と云うやつがある。そいつの前に出ると蛇に睨まれた蛙のように身がすくんでしまう。権六にとって信長は大の苦手だ」
「なるほど」
「その上、権六めは、お市(信長の妹)に惚れ込んでおる。何とかしてお市を後妻に貰いたいと思うておる。犬のように尻を蹴飛ばされても、信長の機嫌をとっているのは、一つはその為だ」
「お市の方がどれほどの美女だろうと、高が女一匹、まさか権六ほどの男が――」
「と思うのは、お前が権六を、いや、人間と云うものを知らんからだ。権六はお前のような煮ても焼いても喰えん奴とちがって、生一本の男だ。一旦惚れ込むと、わっぱのように惚れ込む」
「殿は、わたしを煮ても焼いても喰えぬ悪党と思ってござるのか、怪しからぬ」
「悪党とは云うておらん。容易に料理できぬ複雑な男じゃと云っているのだ」
「殿は、簡単にわたしを料理し、こき使っておられるではありませぬか」
「それは、多分、わしが悪党だからだろうな」
「えい、どうせ、殿には敵わぬ。どうなと思わるるがよい。権六がだめとすれば、さしずめ、猿めと云うことになりまするが」
「筑前か――」
家康は左手で、顎を撫でた。そして、もう一度、くり返した。
「筑前か」

にこっと眼許を笑わせて附け加えた。

「よいところに眼をつけたな」

羽柴筑前守秀吉――信長子飼いの腹心だ。信長によって奴隷の身分から大武将の地位まで引揚げられた男だ。信長こそは、秀吉にとって、その方に足を向けては寝られぬ大恩人である。

その秀吉を、家康も忠次も、信長を殺す最適任者の一人として挙げたのである。

「猿めならば」

「筑前ならば――少くもやる気はあろう。あいつが、わしの思うている程度に利巧な男ならばな」

「やる気があるのならば、やらせましょう、猿めに」

「ところが、筑前もわしと同じじゃ。やる気はあるが、自分ではやらぬ。あいつこそ、主殺しの汚名は人一倍強くはね返ってくることだろうからな」

「権六もだめ、猿めもだめ――とすれば、殿よ、一体、誰にやらせましょうぞ。これはやはり、思い切って殿がやることじゃ。殿ならば、少くも主殺しにはならぬ。殺られそうになったから先に殺った――で済む」

「せくな、まだ他におるわ」

「それは――何者です」

「日向守(光秀)よ」

二

秀吉は大軍を率いて、毛利方の高松城を包囲していた。

高松城は、東北に山が連らなり、西南は川に面し、城の周囲三方は沼と云う要塞堅固の城である。

城中の兵は約五千、秀吉方は三万。

兵数において圧倒的であるにも拘らず、秀吉は強襲方針をとらず、川をせきとめ、堤を築いて、水責めにすることとした。

折柄の梅雨、城は四方を水浸しにされ、水中に浮かんだ小島のようになってしまう。

毛利方は毛利輝元自ら部下の全部隊を率いて、城の救援に馳せつけたが、水に阻(はば)まれて城兵を援(たす)け出すことができない。秀吉の軍と足守川を挟んで対陣し、ただ焦慮するばかりである。

秀吉は本陣を竜王山においていた。

その陣営に、夜中になってやってきた男がいる。

眼のぎょろっとした不敵な面魂(つらだましい)の人物だが、片足びっこをひいている。

「殿よ」

陣幕をくぐると、秀吉に呼びかけた。誰の取次ぎも経ずに自由に出入りできる地位にあるらしい。

「ちんばか、こっちへ来い、酒がある」

秀吉は四十六歳、人々は蔭では、依然として猿と呼んでいたが、どうやら猿よりも禿鼠(はげねずみ)の方に似て

いるような顔になっていた。苦労が多くて少し痩せたせいかも知れぬ。

ちんばと呼ばれたのは、黒田官兵衛孝高(よしたか)、名うての智慧者で、禿鼠の参謀役をつとめている男である。

「いま、呼びにやろうと思っていたところだ」

官兵衛が前にあぐらをかくと、秀吉は盃に酒をついでやった。

「大方、呼ばれる頃じゃろうと思うて、出掛けてきましたわい。へっつい(竈)殿からの使者が着いたらしいと聞きましたのでな」

信長のことを、このちんばは、へっつい殿と云っている。始終、中で火が燃えていると云う意味らしい。

「うむ、上様の出陣が決った」

秀吉は、蔭でも、上様と云う。腹の中では何と呼んでいるか分らない。腹の中でもやっぱり上様と呼んでいるかも知れぬ。だが、それは必しも口に出して云うときの上様と同じ意味とは限らない。上様には、本当の上様のほかに、

——気違い上様、

——上様のくそったれ、

——上様の野郎、

——くたばればいい、上様、

など、色々ある。

「はあ、さようか」
ちんばは、大様な口を利いた。この男、時によると馬鹿鄭寧な口を利くが、時によると友だちに対するような口も利く。禿鼠は、そんなことを一向気にしない。
「来月中旬、京都発向の所存――とある」
「なるほど。では、それまでは城を落とさぬことじゃ」
「むつかしいな。もっと早く陥ちてしまうぞ」
「いけませんな。へっつい殿がやってきて、その御威光で城が落ちたと云うことにせんといけませんな」
「そのつもりだったのだが、困ったな」
「殿はもう、大分、へっつい殿に嫉まれている。あんまり働きすぎ、余り手柄を立てすぎた」
「と云って、働かねば怒鳴られる。手柄を立てねば罵倒される」
「難儀なことじゃ。あのへっつい殿に仕えるのは容易なことではありませんな。殿はよくこれ迄、あのへっつい殿に調子を合わせてこられたものじゃ。全く以て感服の至り、と云うより、堪忍強さに呆れますわい」
「わしには、ほかに生きる道はないのだ」
秀吉は、大したことではないと云った風に軽く受け流したが、ちんばは意地の悪い顔付になって、じろじろ対手の顔を眺めまわした揚句、皮肉な笑いを浮かべた。
「殿、大分、痩せられたな」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com